

「南部」の新批評，新批評の「南部」

(詩的南部連合—ニュー・クリティシズムと「南部文学」の誕生 (2))

越 智 博 美

南部の農本主義からアメリカの「批評」へ。新批評は1930年代初頭の南部農本主義の運動がほぼ5年を経て挫折するのと時を同じくして現れ、わずか10年ほどでアカデミズムの頂点に上り詰めた。しかし、ジョン・クロウ・ランサムやロバート・ペン・ウォレンといった新批評の中心人物は、1930年代前半には保守的な政治・文化運動としての農本主義を担った中心人物でもある。また、新批評の代表的な研究書『よくできた壺』(1947)で知られるクレアンス・ブルックスにしても、ヴァンダービルト大学でランサムの薫陶を受け、ウォレンとともに『サザン・レビュー』誌の編集に携わり、新批評と並行して南部作家を世に送り出していた。産業化を嫌って「保守反動」というレッテルを張られていた農本主義運動の中心を担ったこれらの人物たちの活動が、いくら詩を自律したものとして扱う非政治的な身ぶりによってその出自を見えなくしたとはいっても、なぜほぼ10年のあいだに全米制覇を成し遂げたのだろうか。1940年代に、歴史的、文献学的研究への反動を共通項として林立していた多種多様な「新しい批評(new criticisms)」のなかで、なぜ、彼らのものが唯一の「新批評(New Criticism)」となり得たのか⁽¹⁾。また、ファシズムに加担したエズラ・パウンドを表彰することにより、内容よりも形式を重視する新批評の立場がそれまでの批評を凌駕したことを世間に知らしめることとなったボリンゲン賞をめぐる論争(1949)にしても、なぜニューディールという国家政策に反対していた農本主義者でもあったアレン・テイトラがその審査母体となった議会図書館のコンサルタントとしてその名を連ねていたのだろうか⁽²⁾。

その背景として、ひとつには、すでに現れていたモダニズムの文学作品を読むための手法が求められていたこと⁽³⁾、また、「英文学」が学問の独立を示すには「文学が自律」して他の学問の手を借りない方がよかったこともあるだろう。しかし、それよりもさらに大きな要因がナショナリズムである。政治の議論を受けつけない新批評は国家言説と結びつくことにより、その足場を固めた。まず、第一次世界大戦後の「国民

教育」の中で「精読」が求められたこと、さらに、第二次世界大戦後のいわゆる冷戦体制である。農本主義者・新批評家らは自説のレトリックをその言説に巧みに寄り添わせていった。別の言い方をするならば、ランサム、テイト、ウォレン、すなわちフュージティヴ詩人のあと農本主義者となり、さらに新批評家となった人々のその表向き唐突とも思える変転をひそやかにつなぐ反プロGRESSイヴという態度に冷戦時のアメリカの反プロGRESSイヴが重なりあったのである。

本稿では「審美批評」として政治と隔絶したかに見える新批評がナショナリズムと共謀した経緯を追いつつ、むしろ、そのような国家言説における「南部文学」の成立の場を考察する。

1. 読みとり能力の要請

第一次世界大戦のプロパガンダの成功を契機として、意味システムの研究が盛んになった。とりわけ1930年代後半、次の戦争の足音が聞こえる時期になると、新聞やラジオや映画などのメディアにおける言語の働きに注目が集まってくる。言語の働きに注目して新批評の発展に絶大なる影響を与えたI. A. リチャーズは、この文脈の中に「輸入」された。

「伝達の状態と危険と困難」とを研究し、伝達の水準を高める教育を行うことが重要であり、また、「言語研究が国家の急務」であるという問題意識に基づいた言語研究の書、『意味の意味』（1922）は、とりわけアメリカでは切迫感をもって受容された。コロンビア大学などの学校ではテキストとして採用され、リチャーズ自身も渡米して協力した⁽⁴⁾。プロパガンダに惑わされぬための言語学習方法を探るべく、プロパガンダ分析研究所、ハーヴァードコミュニケーション委員会が設立され、リチャーズは後者に深く関わった⁽⁵⁾。この流れのなかで、英語を精緻に読む技術こそ民主主義の維持につながるとする考え方が出てくる。言語への注目や「精読（close reading）」という、後年新批評の特徴とされるものが国家の要請となったのである。

リチャーズの『文学批評の原理』（1924）は、言語への関心の大きな流れの中に批評を入れ込んで、何が意味されているかではなく、どのように意味されるかを重視し、結果として作品の外部の歴史や伝記や倫理を排することになった。形式的に難解なモダニズム作品を読みながら他陣営と文学研究の覇権を競おうとするアグレリアンたちは、これを見逃さなかった。1934年、リチャーズを読んだブルックスはテイトに長い手紙を書いた。その中でブルックスは、多くの場合心理学や科学をよしとする左翼の

批評家たちがリチャーズを使おうとしている事実を逆手に利用して、左翼批評家がリチャーズが禁ずる「メッセージハンティング」を行っていることを論難することを提案している。それは「彼らの立場を粉碎する (dynamite)」の「戦略」として「価値」があるというのである⁽⁶⁾。1934年という、彼らは新批評家ではなく依然としてアグレリアンとして認識されている頃だが、すでにこの時期から「メッセージを読みとらない」形式主義に向かうだけでなく、それを対コミュニスト批評家の戦略として積極的に使おうとしていたのである⁽⁷⁾。

言語に注目してその形式を読み説く批評は「精読」の技法を提供する。ブルックス、ウォレンによる『詩の理解』(1938)は、言語技術としての批評を、言語のはたらきに対する国家的関心の流れの中に巧みに乗せた。それは「文学」にとどまらず、むしろ「コミュニケーション技術」の位置にすべりこみ、大恐慌、戦中、戦後と国民の課題に依っていったのである。大恐慌の時期には勤め先がないために高校、場合によっては大学にまで進む学生が増加し、こうした学生のために専門職訓練に特化はしないが「まあまあ」の生活ができるための力を与えるための教育プログラムが提唱された。そこでは、大人の世界に順応して生きていくこととコミュニケーション能力が相補いあうものとして重視され、第一次大戦以来のコミュニケーション研究と新批評の培ってきた方法論を利用して「読み手、聞き手が欺かれぬよう精緻な分析をする技術」を教育する必要が説かれていた。さらに、第二次大戦が始まると、兵士として「きちんと命令を発信でき、受信できる」能力を養う必要から、学校内での言語教育は肝要なものとなる。銃後の学生にはプロパガンダに騙されぬよう、映画、ラジオ、新聞を精緻に分析する授業が行われた⁽⁸⁾。このようにして「精読」はアメリカ国民に必要な技術としての地位を得ていったのである。また、プロパガンダに関わる側でも新批評に対する関心は大きかった。かつてルイジアナ州立大学で、その後はイェールでブルックスの同僚だった W. ケンドールは、戦後 CIA と関係し、朝鮮戦争の最中にはトルーマン大統領の意向を受けて、ブルックスに敵国懐柔のパンフレットを作らせようとしていた。それは実現はしなかったのだが、これはこの時期新批評がどのように見られていたかを物語るエピソードである⁽⁹⁾。

第二次大戦後、1957年のスプートニク・ショックは英語教育にも波及した。1930年代以降「国民みな適応」を目指して主流を占めていた、ジョン・デューイの流れを汲むプログレッシブな教育観に批判が集中し、翌年の国家防衛教育法の成立を受けて、むしろ「できる子」の能力を伸ばすエリート教育に目が向けられる。その結果、「できる子」にはますます高度な「読解と鑑賞能力」を与える教育プログラムの開発が急務

となり、大学が主導するかたちで中・高等学校のカリキュラム改革が始まった⁽¹⁰⁾。その中で新批評はさまざまに取り込まれた。イエール大学は英語教育の会議を主催し、クレアンス・ブルックス本人を含むイエールの新批評家たち自らがその会議に出向いて中学、高校の教員に「新批評」のテキスト分析の技術を伝授した。また、「できる子」発見のための判定テストも計画され、そこでは文学の哲学的な側面や倫理を認知する能力ではなく、新批評的なテキスト分析が言語の「運用」能力を測る尺度とされた。MLAもその動きに乗った。その成果として全米英語教員協議会(NCTE)とともに作った教育プログラムは新批評的な読みの実践そのものだった。1961年には科学偏重の教育予算に対抗したNCTEが国家利益に関する委員会を立ちあげ、国家にとっての英語教育の重要性を議会に説いて資金援助をとりつける。それによって始まった「プロジェクト・イングリッシュ」にはノースロップ・フライがかかわり、読み方は新批評にならない、読むべき「ジャンル」にはフライらしさを発揮した。また、マッカーシズムとともに多くの出版物が思想上問題ありとして発刊禁止になっていくなかで、文学や表現の自由を守るための方便としても「内容が大切なのではない、形式だ」という新批評は利用された⁽¹¹⁾。大恐慌から戦中、戦後を通じて新批評の「形式主義」と「精読」は国家御用達の言語技術となっていったのである。

2. 御用達詩人

伝統主義のアグレリアンとそれを受け継ぐ新批評の人々が評価したモダニズム詩がその内奥に保守反動性を秘めていることはすでに知られているが、敵国のいる時代にはその保守反動性が、むしろ民主主義に寄り添うものとなる。おそらくその代表格がアーチボルド・マクリーシュであろう。T. S. エリオットの影響が色濃いマクリーシュはきわめて愛国的色彩の強い詩人でもあった。大恐慌時代にはローズヴェルト大統領政権の文化スポークスマンとでも言えるような立場にあり、戦時中には国務次官、戦時情報局の副局長まで勤め、「国家の文化」をアメリカのナショナリズムと連動したかたちで主導する立場にまでのぼりつめる。彼は学者が「象牙の塔」にこもることを糾弾し⁽¹²⁾、自らの詩作で、また、政府への協力でその立場を表現する、言ってみれば、行動する伝統主義者であった。

1939年にローズヴェルトの命によりアメリカ議会図書館長となったマクリーシュは、図書館業務の能率化に向けた改革に着手したほか、議会図書館の役割をアメリカ文化のアーカイヴと位置づけ、単なる収蔵庫的な図書館を脱して明確に「アメリカの」

図書館になることを目指した⁽¹³⁾。彼のもとで、いわば国家のお墨付きでアメリカ文学関係の企画が続々と実現された。そのひとつが館長任命の「英語詩コンサルタント」である。議会図書館ということではアメリカ詩の頂点に立つ立場でもあるため、代々のコンサルタントはアメリカの桂冠詩人とも称されてきた⁽¹⁴⁾。これは前の館長の時からあった制度だが、マクリーシュは初代コンサルタントのオースランダーをまったく気に入らず、二代目の選出に力を入れた。そこで選ばれたのが『スワニー・レヴュー』編集長を翌年(1944)に控えたテイトだった。引き受けたテイトは、自分のあとをウォレンに託したいと推薦した。エリオットを敬愛するマクリーシュが同じくエリオットを賛えるテイトをコンサルタントにしたのは不思議なことではないが、その結果、1987年までのあいだでコンサルタントに収まった詩人13名のうち、5名が南部出身者(テイト、ウォレン、コンラッド・エイキン、ランドール・ジャレル、ウィリアム・スミス)で占められ、しかもウォレンは二度目に選ばれたときには名誉称号として、じっさいに桂冠詩人の称号まで冠されているのである。南部の詩人を除いても、その顔ぶれは「新批評ごのみ」の詩人たちが連なっている⁽¹⁵⁾。

コンサルタントとなったテイトはマクリーシュの期待に応えた。戦時情報局の求めでナチスからの亡命詩人についての放送原稿を書いたり、詩論の講演をこなしたほか、兵役に取られた詩人の詩のコレクションを作ったうえで、国務省の求めに応じて将来有望な数名を推薦したりと、戦時中の文化政策に深く関わった⁽¹⁶⁾。中でも最大の功績は「議会図書館アメリカ文学評議会(Fellows in American Letters)」の設立であろう。これで集められたのがテイトの人脈に連なる詩人や批評家であり、この評議員たちこそ、前述のボリンゲン賞の審査員をつとめるメンバーである⁽¹⁷⁾。しかも、この賞自体、発案は評議員から出て、テイトが積極的にボリンゲン財団に働きかけた経緯を考えれば、この動き全体がアメリカ詩に対して国家の権威下で行われた「趣味」の改革であったと言ってもさしつかえないだろう。

3. アメリカの新批評

とりわけニュー・アメリカニストと呼ばれる研究者たちの成果によって、「アメリカの文学的想像力は政治イデオロギーを超える」という「アメリカ性」に関するコンセンサスのイデオロギー性や政治学が明らかになったことは言をまたない。ラッセル・ライジングは、歴史を捨象するこのようなアメリカ性が、アメリカがファシズムなどの文明世界の惨事を目の当たりにしたときに出てくる歴史のパラダイム転換にと

もなって出てきたものであるという見解を示している。それ以前の、ヴァーノン・パリントンに代表されるような、直線的なたゆまぬ進歩を信じるプログレッシヴな歴史観が揺るぎ、かわりに、トリリング、ペリー・ミラー、R. W. B. ルイスらによる、進歩に対して懐疑的な、そして多義的、パラドクス、アイロニーに浸された歴史観がひとつのコンセンサスとして出てきた。その結果、プログレッシヴの歴史家が何が歴史の現実であるかを事実即して考えようとしたのに対して、反プログレッシヴの側はそのような事実には信用をおかず、むしろ、心理学や芸術や文学に表現された人間にこそ真実があるとして現実の場を政治的諸制度から人間の精神へと内面化した⁽¹⁸⁾。

その結果、トリリングの文学分析もそのような多義性、パラドクス、アイロニーという新批評家の述語を利用する、というのだが、ここではそれよりはむしろ、新批評家がアグリアンとして持っていた歴史観を思い出しておきたい。南北戦争、その後の混乱、20世紀の貧困、立ち後れたイメージに苦しむ南部の中にいた彼らの歴史観は、エリオットから借りた構築物としてのヨーロッパを基にした仮構の歴史に向くという、むしろ現実の歴史を捨象するものだった。そして、現実の問題はプログレッシヴな改革で直線的に前進して解決できるものではないという立場を取った彼らは、解決策を文学に求めた。ここにきわめて強いパラレルを見てとることができる。たとえば、デューイのプログレッシヴ教育に対して戦後の教育現場で起きた批判は、今述べた歴史のパラダイム転換の文脈で捉えられるが、テイトはすでに20年以上前の1931年に、デューイのその先に見える進歩的 (progressive) な「計画経済」への嫌悪をあらわにしていた⁽¹⁹⁾。わけても、『私の立場』(1930)に続いて第2のアグリアンのマニフェスト集という側面も持つ保守陣営の論集『誰がアメリカを所有するのか』(1936)は、反プログレッシヴとしての反ニューディールという立場を明瞭に打ち出している。言ってみれば、南部農本主義者は東部の知識人に先だって、すでにあらかじめ進歩史観を捨てていたのである。

こうしてみると、スピラーやマシーセンら、歴史への不安を抱えたアメリカニストが「時間を超越した」アメリカ文学のアメリカ性を見ようとするとき、彼らはアグリアンと相同の道を辿っていた、という言い方ができるだろう。そして、それはアグリアンたちが失われた有機的な社会を現実の歴史の中に再構築するのではなく、むしろ文学の中に見いだしたときに、用意されていた。作品全体の有機的関連を見るというロジックが、アメリカ文学全体の有機的發展を見ることに利用され、その意味では新批評はアメリカニズムに手を貸すことになったのだ。

こうして表向き手を結びそうにないアメリカニストのナショナリズムと新批評の超

然とした態度は手を取り合う。けれども、新批評の担い手たちは文学の中にのみ、そのロジックでのみ「全米」レベルに入り込んだのではない。先にも見てきたように、むしろ積極的に陣営を築き、戦っていた。象牙の塔にこもっているように見えるのは作品を特権化して集中するその研究の姿勢がそうなのであって、むしろ、彼ら自身は自らの「立場」の陣営化を意図的に目指し、時代の風向きをうまく取り込んでもいたのだった。たとえばランサムはニュー・クリティシズムを論じるときに、自らの南部性を押し出さない。制約なしの芸術世界の方がむしろ現実世界よりも現実の世界である⁽²⁰⁾、と詩を現実のコンテクストから引き離れた地平に提示されるのは民主主義国家のヴィジョンである。詩を構成する要素は現実と同じく多種多様で、それらが有機的に組合わさって「ひとつのリンゴ」、「多くのものからなるひとつ」を形成するというのである⁽²¹⁾。この言葉に人種のるつぼのニューヨークやアメリカのモットーを思い出さない人はいないだろう。

南部の反プロGRESSイヴの伝統主義者の担う新批評は、むしろ非政治的に文学を扱う姿勢を使って、PROGRESSイヴであることを止めたアメリカの民主主義に、あるいは反イデオロギーの冷戦ロジックに、自らをゆだねていきもした。新批評は第二次大戦から冷戦時代にかけてのナショナリズムのイデオロギー的国家装置の文化面の一翼を担うことで制度化を手に入れたのである。

4. 新批評の南部文学

アグレリアンと新批評の繋がりを見てきたとおりである。そして、南部文学はその新批評に支えられている。たしかに、フュージティヴ・アグレリアンが新批評を語るときには南部は前景化されない。ひとつにはジャンコヴィッチが指摘するように、ランサム、テイト、ウォレンというと「即ち南部アグレリアン」というイメージが強すぎるために、人々に現代社会への批評家として見てもらう意図をもってアグレリアンから新批評家にシフトした、というところもあるだろう⁽²²⁾。じっさい、1936年に、ニューディールへの提言として、アグレリアンやイギリスの保守主義者らが組んだ保守派のアンソロジー、『誰がアメリカを所有するのか』が結局力を持ち得なかった「失敗」からすれば、ちょうど、冷戦期に左翼系の『パルチザン・レビュー』が左翼政治を語ることで自体がかなわなくなったためにむしろ文化的なアヴァンギャルドに向かうのだ、と述べながら方向転換したときの状況⁽²³⁾と同種のものが農本主義者を取りまいていた、という考え方もできるかもしれない。

しかし、だからといって彼らが南部の文学に何もしなかったかという、むしろ逆ではないだろうか。「アメリカ」に寄り添う彼らの文学世界の根は他でもない南部にある。新批評家としてのブルックス、ウォレンがイェールへ、テイトはニューヨークをベースに活動をし、という時期になると、もはや新批評がもともとアグレリアン運動の変奏として始まったことなど忘れ去られることとなった。けれども当のアグレリアン自身が、その状況をして「成功」と呼んでいたことを見逃してはならないのではないか。テイトはアグレリアン仲間として、『私の立場』と『誰がアメリカを所有するのか』で共に執筆したデヴィッドソンに宛てて以下のようにしたためた。

君（デヴィッドソン）は農本主義の運動は失敗だったと思っているようだが、僕はそれは過去も、今現在も大変な成功を収めている、と思っている。ただ、当時はアグレリアンの運動をしたからといって、それが政治的に何か影響を持てるなどとは到底期待できなかった。これは人間の伝統を容認しなす運動だし、そのことが目標でもある……⁽²⁴⁾。

R. G. デイヴィスはパウンドのボリンゲン賞受賞に反対する立場から、新批評の陣営の持つ価値基準、つまり、「生きた言語、文学の感受性や詩の価値は伝統的、カトリック的、地方的、神話的、貴族的なもの、悲劇や超越的絶対や罪と優美さを感じとる感覚によって支えられていると主張し、言語、感性、価値は合理主義、リベラリズム、実証主義、平等主義、シェリー主義、社会学、啓蒙主義イデオロギーによって破壊される」という基準を痛烈に批判した。その基準が「戦術と集団行動」、「他者への攻撃」、「互いの称賛」をつうじて増長されてきた、とするデイヴィスの言葉は、そのような基準がまさにエリオット、オーデン、アグレリアンらによって営々と築かれたものであることを理解していたことを示している⁽²⁵⁾。少なくとも1949年の段階では、アグレリアンの立場と新批評の接続は「見えて」いたのである。が、おそらくそのような視線も、たとえばテイトがパウンドのボリンゲン賞受賞を擁護して述べた「これは何かについて言っているのではない」というラディカルな形式主義の言葉によって阻まれてしまう。アグレリアンと新批評とのきわめて政治的な運動のさまは、形式重視が纏う「非政治的、貴族的超然」の衣の陰に見えなくなってしまうのだ。おそらくここがポール・ボヴェが指摘したように、「新批評の南部的契機」を見逃してしまう後年の研究家の躓きの石でもあるが、同時にキャンノンとしての南部文学というジャンルの成立・再生産の場でもある⁽²⁶⁾。

ブルックス、ウォレンがまず「教科書」から出発したことにはそれなりの意味があ

った。形式としての作品であれば、何々文学、というジャンル分け抜きにすべてを同列に置くことができた。『詩の理解』で扱われている詩は英詩が多く、その中に、エマソンなどのアメリカ文学の大御所の作品とともにアメリカ詩人の中でもモダニズム陣営の H. D. , パウンド, エリオット, テイトらの作品が混じる作品構成をとっていた。読み進むにつれ「だんだんと難しく」なるその教科書の最後はキーツの「よくできた壺」が飾っていたが、その前にはテイトの「南部連合軍の戦死者に捧げる頌」が配されていた。小説版も同様で、普及版となっている簡略版 (*The Scopes of Fiction*) の方では、英米作家のみならず、アイルランド、ロシアの作家も取り混ぜた合計 33 の短編小説のうち、アメリカ作家のものが 17 編、うち 8 編がユードラ・ウェルティ、キャサリン・アン・ポーターなどの南部作家で占められていた⁽²⁷⁾。このかたちは『ザサン・レヴュー』でも同様で、批評と作品を抱き合わせて紹介していく形式は、批評に「合う」ものを良作として人々に見せる役割を果たしていた。この雑誌はフェージティヴ・アグレリアンは当然のこと、ポーター、ウェルティ、ゴードン、その他の南部作家の作品を批評理論のあいだに差し挟んで、その作品を「新批評のお墨付き」で続々送りだしていたのである。ランサムが定義したような、文明の病として南部に花開くモダニズムにはマグノリアの咲きほこるプランテーションの景色は必ずしも必要ではなかったし、新批評の分析からは一見して「南部性」なるものは出てこないことにはなっていただろう。けれども、教科書や雑誌に繰り返し同じ名前が載った末にテイトが「1918年に南部はもういちど世界に入りなおした。けれども、そのときに後ろ向きの視線を投げかけた。その後ろ向きの視線が南部ルネッサンスをもたらした。現在の中の過去を意識する文学を」と、南部ルネッサンスを「伝統主義」としてのモダニズムとして再定義したとき⁽²⁸⁾、モダニズムの「時間の共存」は「現在の中の過去」という「南部独自の歴史性」に、すでに学習の定番となっていた一定の作家の作品は「南部文学」に変換される用意がととのっていたことになる。オーズリーは『私の立場』に寄せた論文で、南部がその後進性のために、ハーヴァードやブラウン等の名門校の学長から「アメリカの学校教師のあらたなる伝道の土地」であり「暗黒の地域に知識と文化を広めるのだ」とあからさまに植民地扱いされたことに憤慨し、そのようなものは「無視すればいい」と言う⁽²⁹⁾。しかし、ブルックス、ウォレンら、文化の営みの中央に進出しようとした人々はむしろ戦うことを選んだ。自らの雑誌やテキストを「趣味をただす」、「想像力を改善」するプロジェクトとして構想した。これは一種の「書き返し (write back)」行為と言ってよいだろう。北部からの伝道の場所とされていた南部の知識人は、むしろ北部を自らの伝道の場所として、趣味を「改革」した

のである。

冷戦文化なるものがあるとすると、そこでは反イデオロギーが格好のキャッチフレーズとなり、そこに加担するものは文化資本に格上げされて、投資の対象になる。この時期、学校のカリキュラムに、ボリンゲン賞をはじめとする賞に、『ケニヨン・レビュー』などのプロジェクトに、フォード、メロン、ロックフェラー等々の財団が行った文化投資にはめざましいものがある。冷戦時のあらたな英語カリキュラムにはフォードやロックフェラーが積極的に運営基金を出しているし、議会図書館のプロジェクトについても同様だった⁽³⁰⁾。これが経済界からの支援でありプロジェクトでもあったとすれば、アメリカ文学研究者の最も大きなプロジェクトのひとつはフォークナー研究であった。フォークナーは新批評家、政治的振る舞いを止めた『バルティザン・レビュー』の面々も相乗りしたかたちで、南部的でありアメリカ的であり世界普遍という評価を与えられ、フォークナー研究はひとつの大きな制度として冷戦時代のアメリカ文学研究に貢献した⁽³¹⁾。「南部文学」がフォークナーを頂点として語られるとするならば、それはきわめて正しく冷戦のロジックに合うことになる。

フュージティヴ詩人に出発した南部の伝統主義の美学の伝統は、田舎の反動どころか、新批評というアメリカ文学のキャンオンとして南部に凱旋した。新批評が作ってきた語彙と修辞がそのまま当てはまる南部文学を発表し、そこから南部文学のアンソロジーを編纂することは、新批評的な構築物としての南部文学を編みあげていくことにほかならない。マイケル・クレイリングの指摘どおり、南部文学史のかたちを整えたのはウィーヴァー・ヤルービンであろうが⁽³²⁾、それを可能にする「新批評」という土台づくりをこそ南部新批評家たちは用意した。その意味では、南部文学は、アグレリアンの企図から出立した新批評がアメリカの批評となる、あるいはそのように振る舞うことで、逆接的にそのキャンオンとしての「アメリカ文学」の中に保証されたということができる。

マシーセンの『アメリカン・ルネッサンス』に代表されるようなアメリカニズムがアメリカの独自性という考え方に支えられたアメリカ文学のアメリカ性の所産⁽³³⁾だとするならば、同時代にアメリカ文学のキャンオンに入り込もうとした南部文学もまたその歴史の例外性を語ることで南部性を裏打ちし、それにささえられた南部学（サザニズム/Southernism）を確立したのではないか。また、そのロジックがそれらと時を同じくする新批評が加担した冷戦期のコンセンサスの時代のものであったとするならば、南部性の構築というプロジェクト自体が極めて歴史性を帯び、かつ、そのロジックにおいてアメリカニズムのコンセンサスに同調するものであった、あるいはアメ

リカニズムのロジックを南部の文学という舞台上で再演していた、ということが出来るだろう。それどころか、反プロGRESSIVのアグレリアンの伝統主義がアメリカニズムの先行モデルの少なくとも一端を提供していたとすれば、アメリカニズム内での「自律した」南部性構築モデルは、すでにアグレリアンの伝統主義が用意していた、ということになる。そして、その限りではアグレリアンたちの文学産業のもくろみは実現していた。というのも、彼らの失敗したプロジェクトとしてのアグレリアン運動は後の学者たちの語りにより南部らしさの苗床として新批評からは切り離されて非歴史的な歴史のページをつけ加える一方で、政治性を排したかに見せる新批評の政治学は種々の文学雑誌を通じて冷戦期のロジックと共振し、縋り合わさり、その中で地方主義的モダニズムを非政治的に格上げしてモダニズムとしての「南部ルネッサンス」の土台を作っていったからである。その雛形を作った彼らこそ、実は姿を隠した南部文学の創立者であったのだ。若き南部連合支持者と呼ばれたアグレリアンたちの有機体的ごとき社会のヴィジョンと詩のヴィジョンは、そのヴィジョンを絶えず自己完結的に再生産する南部研究という制度というかたちで、その中に保存されたのである。

5. 詩的南部連合

若き南部連合支持者（フュージティヴ・アグレリアン）は詩の世界に有機的な秩序を求め、最終的には文学制度の南部連合として自律という名の独立を果たした。モダニズム的な「現在の中の過去」を「南部の」特徴となる「歴史性」として新批評を表舞台から隠し、新批評家としては南部性をことあげせぬかたちで、そのキャンノンの中に南部作家を編み込んでいった。こうして、彼らが雑誌や教科書を通じて実践した言説制度は新批評によって作品を読み、新批評家に見合う作品を発表し、その作品を新批評で分析し……とほとんど自律したシステムとして閉じた自己増殖を繰り返す。この土台の上に後継者たちは南部文学を制度として整え、さらなる南部文学を生み、繰り返し南部性とは何か、というサザニストの問いを発し続けることにより、それを共有して想像と創造の共同体を作ってきた。非政治性を纏う新批評の枠をあてはめつづける限り、逆説的にそれは確実に南部文学を再生産し、アイデンティティを確立したが、皮肉にも、ボヴェの指摘するような問題を、つまり、南部文学と新批評との関係や、新批評のアグレリアン性（南部性）など、それぞれのあいだに確かに存在する関係の絆を見えなくもした。南部文学という枠組みの成立の政治性もそれは同様であったろう。

アメリカニズムの作り上げる有機的全体としてのアメリカ文学の中に、有機的な部分として組み込まれたのが南部文学であったとするならば、アメリカニズム、冷戦のロジック、新批評を繋ぐ隠微な共犯関係があかると出た今、そのようなロジックにこそ支えられていた南部文学連合のロジックも揺らがざるを得ない。再構築——reconstructing——はおそらく当分「完了形」になることはなく続いていくのだろうが、それは決して悪いことではない。ジュディス・バトラーがカテゴリーを論じた箇所はおそらく南部文学というカテゴリーに置き換えても当てはまるであろうから——「カテゴリーが本質的に不完全であると仮定することによってのみ、そのカテゴリーをさまざまな意味が競合する永遠に使用可能な場として機能させることができるから」⁽³⁴⁾。

注

本稿は、一橋大学研究年報『人文科学研究 39』（2002）157-203 頁掲載の「詩的南部連合——ニュー・クリティシズムと「南部文学」の誕生」に続くものであり、また、そこで設定した問題の結論として位置づけて構想されたものである。そのために人名、用語、エピソードなど、あえて、説明を加えぬままに論考を進めさせていただいている部分がある。

1. 1940年代には、学問としての方法論を備えた種々の批評を総称して「新しい批評」としていた。Sacvan Bercovitch, ed., *The Cambridge History of Literature*, vol. 8 (New York: Cambridge University Press, 1996), p. 292.
2. ボリンゲン賞論争の詳しい経緯については、William McGuire, *Bollingen: An Adventure in Collecting the Past* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1982), pp. 208-17.
3. 1920年代になると、文学を人に何か教えるものだとする考え方ではモダニズムの作品が読みこなせない状況が問題視されていた。その流れのなかで形式を見る批評を要請する意見が出てきていた。Arthur Applebee, *Tradition and Reform in the Teaching of English: a History* (Urbana, Ill: National Council of Teachers of English, 1974), pp. 110-117.
4. I. A. リチャーズ, C. K. オグデン, 石橋幸太郎訳, 『意味の意味』（べりかん社, 1967）, 25頁。
5. Applebee, p. 157.
6. Brooks to Tate, April 19, 1934, in Alphonse Vinh, ed., *Cleanth Brooks and Allen Tate: Collected Letters, 1933-1976* (Columbia: University of Missouri Press, 1998), p. 19.
7. 彼はその中でとりわけ、リチャーズが、大切なのは詩の内容ではなく、詩が何であるかだ、とする立場を取り上げ、テイトがモダニズムの詩について「スタンザは真実でもなけ

- れば誤りでもない。それはそこに存在しているものである」としていたことと近いものがある、とたまたまかける。
8. Applebee, pp. 139-166.
 9. Mark Royden Winchell, *Cleanth Brooks and the Rise of Modern Criticism* (Charlottesville: University Press of Virginia, 1996), p. 262.
 10. マシーセンも教育関係の本の書評でこの動きを支持するコメントを寄せている。F. O. Matthiessen, "Education after the War," *The New Republic* (Jan. 24, 1944), pp. 121-122.
 11. Applebee, pp. 185-204.
 12. "The Irresponsibles," *Nation* 150 (18 May 1940), pp. 618-23. 彼はまた UNESCO 創立に尽力したことでも知られている。
 13. Charles A. Goodrum, Helen W. Dalrymple, *The Library of Congress* (Boulder, Col: Westview Press, 1982), pp. 42-47.
 14. William McGuire, *Poetry's Catbird Seat: The Consultantship in Poetry in the English Language at the Library of Congress, 1937-1987* (Washington: Library of Congress, 1988), p. 24.
 15. ルイーズ・ボーガン, ロバート・ロウエル, レオニー・アダムズ, エリザベス・ビショップなど。McGuire, pp. 12-13.
 16. McGuire, p. 81.
 17. Katherine Garrison Chapin, Katherine Anne Porter, Willard Thorp (プリンストンの学者。テイトの友人), Mark Van Doren, Van Wyck Brooks, Paul Green, Carl Snadburg とテイトが最初のメンバーである。McGuire, p. 82.
 18. Russel Reising, *The Unusable Past: Theory and the Study of American Literature* (New York: Methuen, 1986), pp. 93-97.
 19. Tate to John Peale Bishop, Aug. 10, 1931, in Thomas Daniel Young and John Hindle, eds., *The Republic of Letters in America: The Correspondence of John Peale Bishop and Allen Tate* (Lexington: University of Kentucky Press, 1981), pp. 45-46, cited in Paul Bové, *Mastering Discourse: The Politics of Intellectual Culture* (Durham: Duke University Press, 1992), p. 118.
 20. John Crowe Ransom, "Wanted: An Ontological Critic," in *The New Criticism* (Norfolk, Conn.: New Directions, 1941), p. 293.
 21. Ransom, p. 328.
 22. Mark Jancovich, *The Cultural Politics of the New Criticism* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), p. 27.
 23. Lawrence H. Schwartz, *Creating Faulkner's Reputation: The Politics of Modern Literary Criticism* (Knoxville: The University of Tennessee Press, 1988), pp. 143-171.
 24. Tate to Davidson, Dec. 4, 1943, in Fain John T. and Thomas D. Young, eds., *The Literary Correspondence of Donald Davidson and Allen Tate* (Athens: The University of Georgia Press, 1979), pp. 328-29. この一節はフォークナー批評の制度化を冷戦のロジックとアグレリアン・新批評のからみで鋭く論じた Schwartz も注目している。新批評が

農本主義と接続している、ということを経験の面から言うことはできるが、生の声として、そのような「実感」を伴っているものとして、この手紙は重要であるし、また、新批評は農本主義を「止めた」、ないしは「失敗したから」というかたちで2つを分けて考える向きには強力な反証にもなりうるからであろう。

25. W. H. Auden, Robert Graham Davis, Clement Greenberg, Irving Howe, George Orwell, Karl Shapiro, Allen Tate, and William Barret, "The Question of the Pound Award," *Partisan Review* 16: 4, pp. 512-22. うち Davis による該当箇所は p. 514.
26. Bové, pp. 113-142.
27. Cleanth Brooks and Robert Penn Warren, *The Scope of Fiction* (Englewood Cliffs; New Jersey: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1960).
28. Allen Tate, "The New Provincialism," *The Virginia Quarterly Review* 21: 2 (Spring 1945), p. 272.
29. Frank Owsley, "The Irrepressible Conflict," in *Twelve Southerners, I'll Take My Stand: The South and the Agrarian Tradition* (1930; Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1977), pp. 61-91.
30. Applebee, pp. 192-3; McGuire, p. 59.
31. このプロセスについては Schwartz を参照のこと。
32. Michael Kreyling, *Inventing Southern Literature* (Jackson: University Press of Mississippi, 1998).
33. Sacvan Bercovitch, *The Rites of Assent: Transformations in the Symbolic Construction of America* (New York: Routledge, 1993), p. 375.
34. Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (New York: Routledge, 1990). ジュディス・バトラー、竹村和子訳、『ジェンダー・トラブル』(青土社、1999)、42頁。2000年のMLAの年次大会では、従来型の枠組みとは違ったところで南部文学を論じてみようとするセッションが複数あった。Susan Donaldson, "Southern Narratives and Haitian Shadows" によるハイチなど、南部の南を取り込む研究、Robert H. Brinkmeyer, "California and Postmodern Southern Literature" のように北部ではなく、西部に目を向ける研究等々。おそらくこういった研究がこれまでの枠組みのあり場を逆照射していくはずである。